

Title	臨床哲学Café&Bar報告テーマ : 「がんばれ」という言葉について
Author(s)	渡邊, 美千代
Citation	臨床哲学のメチエ. 10 P.40-P.41
Issue Date	2002
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/4742
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

臨床哲学 Cafe&Bar 報告

テーマ

「がんばれ」という言葉について

渡邊美千代

日時：9月8日(日) 会場：福岡工業大学

全体進行役：三浦 / サブ進行役：寺田

グループ討議進行役：三浦・寺田・渡辺

進行手順

(1) 「がんばれ」という言葉に関する体験・考えなどを参加メンバーが述べる(30分)

(2) (1)をもとに問いをつくる(30分)

(3) 問いに対する答えを参加メンバー全員で対話を重ねながらつくりあげる(60分)

ルール

1. 人の話をよく聴くこと / 2. 手を挙げ指名されてから発言すること / 3. 自分の言葉で話すこと(本などの引用をしないこと)

1. 「がんばれ」という言葉に関する体験から

第10回日本ホスピス・在宅ケア研究会・九州大会の2日目に大阪大学グループ&佐賀バイオエシックスグループと共同で臨床哲学Cafe&Barを行った。進行役の三浦さんによってまず、ルールと進行手順が説明され、テーマは看護学生さんからの要望で「『がんばれ』という言葉」に決定。はじめの30分間は『がんばれ』と声をかけたとき、または声をかけられたときの体験やそのときの考えを参加者から募り、自由に意見を述べてもらう。

参加者は、現在闘病生活中的の患者さん、そして看護師さん、看護学生さん、教育に携わる人など、約50名程の参加メンバーで構成されていた。看護師さんの多くは、臨床で日々、病と闘っている患者さんに安易に「がんばって」と声をかけることに抵抗を感じる人が多いと言う。特に死を間近にされた患者さんには、「がんばって」と言うより「もうこれ以上がんばらなくても良いですよ」と声をかけたくなるようだ。「臨床で患者さんに『がんばって』と言うことが、何かその場し

のぎの『がんばって』になってしまっているように感じられる。『がんばれ』という言葉かけが患者さんを否定しているようで、患者さんそれぞれのがんばりを受けとめていないように思える」といった意見が出された。入院された経験をもつ患者さんからは、「がんばって」と言われ、看護師さんに気に止めてもらっていることがうれしかったことや元気がでたこと、その反面、恐怖感の強い検査前に「がんばれ」と言われ、かえって検査に対しての嫌悪感をもったことがあるといった体験も述べられた。また、教育にたずさわる参加者からは、つぎのような疑問が出された。不登校やひきこもりの子供たちにとってがんばらないといけないことはよく分かっているはずである。しかし、がんばれないのである。自分に向けて言う「がんばれ」と他者にいう「がんばれ」には違いがあるように、誰に向けての「がんばれ」か、また「がんばれ」と言うことの関係の相互性を考えていく必要があるのではないか。以上の経緯をふまえたうえで、参加メンバーが3つのグループに分かれ、問いを作る為の対話へと進んでゆく。

2. 「『がんばれ』という言葉の問い

グループ討議では、全体の意見交換を深め、以下の問いが出された。

- ・「がんばれ」のもっている意味は何か。
- ・臨床などで同等の関係でない患者と看護師間で「がんばれ」と言ってもよいのだろうか。
- ・自分に向けて「がんばれ」と他者に向けた「がんばれ」はどう違うのだろうか。
- ・相手の気持ちを知らないで「がんばれ」と言って良いのだろうか。
- ・「がんばれ」と言う時は相手を見極めないといけないのか。
- ・誰が、がんばっていると評価できるか。
- ・一人でがんばることはできるか。
- ・「がんばる」と言うことで自分を拘束していないか。
- ・努力することが「がんばる」ということなのか。

・「がんばれ」という時はどういうタイミングが必要なのか。

参加メンバーからは、「がんばって」という言葉を他者に向けてことに責任を感じつつ、他者を理解したうえで、「がんばれ」と言葉をかけることに困惑しての問いがだされた。また、「がんばれ」と言うことが努力することを強いており、「がんばる」ということが自分自身や他者を評価することになっていることへの問いもだされた。さらに「がんばれ」という声かけは、どのような状況で可能なのかといった議論も活発に行われた。問いが出される過程で、「がんばれ」という言葉かけをするときは、関係の相互性やその場の文脈に大きく影響されていることを確認していった。

時間の関係上、多数決で『「がんばれ」という時はどういうタイミングが必要なのか。』の問いに絞られ、再度、全体で問いに対する答えを見出す為の対話が行われた。

3．つくりあげられた「答え」

1)「がんばれ」という言葉を発する人と受ける人との関係性を考慮する必要がある。

2)「がんばれ」という言葉は励ましや相手の負担になり得ることを考える必要がある。

さきの問いでの「タイミング」という言葉は、「時」といった時間を意味するのではなく、人間対人間の関係の相互性を意味することをねらっている。また「がんばれ」というときは、他者の感情の動きやその文脈によって励ましにもなり得るし、相手の責任を問うことにもなり得ることを改めて確認したように思う。答えを見いだすには、60分という時間制約の為、語られた体験を何度も立ち戻ったりすることはできなかったが、参加メンバーのみなさんには自らの体験を積極的に語り、語る体験の中に問いの多様性があること、また一人ひとりの語り、生活史的状況の中で語られて、日常生活における意味を重ね合わせながら構成していったことに気づかされ

る対話になったようだ。

4．反省とお詫び

今回、始まりが朝9時ということもあり、出足が悪く、始まりの時点で参加メンバーが15名ほどであった為、2教室で行う予定を急遽1つの教室で行うことになった。最終的には50名を越える参加人数になり、1つの教室に収まることができず、途中参加の方をお断りすることにもなった。期待をもって足を運んで頂いたみなさん、大変申し訳ありませんでした。時間差をつけて開始することも含め、飲み物やカフェといった自由な話合いの雰囲気作りの場の提供など事前の打ち合わせが密に必要なだったと反省している。

5．おわりに

Cafe&Bar 終了後に、何人かの参加メンバーが今回の試みについて次のような感想を伝えに来て下さった。「個々の事例を大切にしながら、じっくりと自分自身の態度を反省することができた」、「事例には多くの問いと深い意味があることに驚いた」、「さまざまな体験をもつ人たちと共同して考えることの面白さを実感した」など。また、「最初、カフェといったくつろいだ雰囲気より、張りつめた雰囲気があり緊張した」との感想も寄せていただいた。今後、雰囲気づくりとして音楽を流すなどの工夫も配慮していく必要があるかと思う。

今後も対話と討議を重ねながら論理的な共同的思考ができる場を多くの方々と協力して作って行きたいと思う。今回、佐賀バイオエシクスグループとの協力で行われた哲学カフェであったが、もっと頻繁にカフェをしたいと感じている佐賀バイオエシクスグループと今後どのように協力しながら哲学カフェの機会をもっていくかを検討することも課題のひとつであると考えてる。

(わたなべみちよ)